

文体素としての名詞語群

志 賀 謙

名詞語群 (noun cluster) とは、名詞を中心にして、その修飾部が求心的に、核名詞とパタンしている語群をいう。名詞は、動詞・形容詞と共に、意味的に独立するもので、機能性の強い、代名詞・前置詞・接続詞などとは異なり、直接的なイメージを喚起し、かつまた、名詞自体は、概念発想の基礎ともなるべきものであるから、名詞語群の構成や、その性質は文体に少なからざる影響を及ぼしている。英語表現の一つの特徴として、名詞中心的ということがいわれているが¹⁾、それはとりもなおさず、文体素としての名詞語群の重要性を示すものであろう。

形式はスタイルの概念と密接な関係にある。文体も客観的形式と個性的様式の葛藤的融合から生まれるのではあるが、その場合、あくまでも文章形態と文体とは、はっきり区別しなければならないとされている。たしかに、文体を表現＝形式＝スタイル、というような割り切った関係でとらえることは馬鹿げているかもしれないが、しかし、形式面での追求を行なうことなく、形式の追求は決し様式への接近を意味するものではないと、一笑に付するわけにはいかないように思われる。少なくとも文体研究に欠くことのできない前提の一つとして、総合的かつ綿密な形式研究が行なわれなければならない²⁾。その様な意味で、本論では形式素としての名詞語群が、文体素としてのどのような可能性を内包するかという問題をとりあげていきたい。

1. 構造論的に見た名詞語群

英語の名詞語群は、その中で占める核名詞の位置や、それを修飾する語

群の種類によって、いくつかの型に分類することができる。

a. 核名詞が名詞語群の最後にくるもの

1. Determinative+Noun.
a boy / these books / this house
2. Determinative+Noun+Noun.
a school boy / a cannon ball / the baseball game
3. Determinative+Adjective+Noun.
a tall boy / these beautiful flowers / the rich people
4. Determinative+Adverb+Adjective+Noun.
a very good boy / these awfully beautiful flowers
5. Determinative+Participle+Noun.
a sleeping boy / a fallen leaf
6. Determinative+Gerund+Noun.
a sleeping car / the smoking room
7. Determinative+Compound Modifier+Noun.
a house-to-house research / the easy-to-follow rule

(もちろん、名詞語群のはじめに必ず、determinative がくるとは限らない)

b. 核名詞が語群の前位をとる場合

1. Determinative+Noun+Adverb.
some people upstairs / the paragraph above
2. Determinative+Noun+Prepositional Phrase.
the man in the truck / a book on the desk
3. Determinative+Noun+Participle Phrase.
the boy reading a book under the tree / these books sent by my uncle in America
4. Determinative+Noun+Infinitive Phrase.
his intention to become an English teacher / a house to live in with my brother
5. Determinative+Noun+Adjective clause.
a book which was sent to me by my uncle in England / the village where my father was born
6. Determinative+Noun clause.
a hope that she will come back alive / the news that a friend of mine

文体素としての名詞語群

was seriously wounded in the traffic accident

名詞語群は大体以上のように分類することができる。しかし実際には、これらの型が、個々に現われるのではなくて、相互に重なり合って、大きな名詞語群を形成する場合もあるし、以上述べた以外の特別な語群もある。

名詞語群のもつ性質のうちで、一番顕著なものは、この語群は、核名詞またはそれを含む被修飾部と、それを修飾する修飾部の二つの要素に、しかも各修飾層に応じてわけることができるといえることである⁸⁾。これをいま、次の語群を用いて例を示せば、次のようになる。

the young principal of the high school | *who answered his letter*
(被修飾部) (修飾部①)

the young principal | *of the high school*
(被修飾部) (修飾部②)

the | young principal
(修飾部③) (被修飾部)

young | principal
(修飾部④) (核名詞)

各修飾語群の限定性は、核名詞に対する位置と、それからの遠近によって決定される。

核名詞が名詞語群の後位をとる場合は、固定的に対象を把握するという意味で、抽象的、静的な感じをあたえ、修飾部の記述性がかなり限定されるので閉鎖的な表現といえることができる。それに対して核名詞が名詞語群の中で前位をとる場合は、動的な対象把握であり、修飾部の記述的表現力が限定されることなく、必要に応じて、それ自体の修飾部をさらに従えることも自由である。この意味で、後者はかなり開放的な表現といえる。

また核名詞が修飾部の前位をとる場合には、核名詞が修飾部と分離することもある。これは文体上の均衡感や、あるいは名詞語群より強い統辞力が介入するためである。

2. 意味論的に見た名詞語群

名詞語群を意味論的に見ると、ネクサス関係を内包するものと内包しないもの、そしてまた、内包されるネクサスの性質によって、次の6種に分類できる。

a 主辞昇核、ネクサスの主語に相当するものが核名詞に昇核したもの
the tall boy (<the boy who is tall<the boy is tall) the sleeping boy /
the road leading to the station / the first man to arrive / the man upstairs /
the once-clamorous room / the man in the garden.

b 賓辞昇核⁴⁾ ネクサスの述語が核名詞に転化し、結果的にはネクサスを抽象凍結した形の名詞語群。

his intention to become an English teacher (<he intends to become an English teacher)
their great knowledge of English grammar (<they know English grammar very well)

c 核転位 ネクサス中の核名詞が転移したり、名詞以外のものが核名詞に昇核する場合、すなわちネクサスの変質したもの、

1) 核名詞の転位

a book to read after dinner (<to read a book after dinner)
the village in which my father was born (<my father was born in the village)
a book of her own writing

2) 核名詞への昇核

their success in the attempt which you wanted (>you wanted them to succeed in the attempt)
the beautifulness of the girl (whom) he married (<he married a beautiful girl)
peace in which they lived (<they lived peacefully)

d ネクサス従属の名詞語群

the news that a friend of mine was [the news of a friend of mine having been] seriously wounded in a traffic accident.

文体素としての名詞語群

the hope that she will come [the hope of her coming] back alive

e 単純命題を内包する名詞語群

A sensible girl (=If she were a sensible girl, she) would never do such a thing.

The protagonists (=That they are the protagonists) explain the limits of what was achieved.

f ネクサスを内包しない名詞語群

this village / the capital of Japan / a story of many years ago

名詞語群を構造や意味から分類すると、大体以上のような原型が得られる。実際には、これらが重なり合って複雑な名詞語群をつくりあげている場合もしばしばある。また以上のように分類された名詞語群のすべてが文体と直接関係するわけではない。ここでは、作家の文体意識と、作品のテーマにひたされてはじめて、文体素としての可能性をもつようになるものだけをとりあげてみたい。

3. 文体素としての名詞語群

a 名詞語群の長短

英語の名詞語群はさきにもべたように、*determinative+head noun* という単一な構成を持つものから、原型的名詞語群のいくつかが累積したり、あるいは、一つの名詞語群の中の名詞が二次的な名詞語群の核名詞となる場合のように、二次的・三次的な小名詞語群を内包する、かなり *span* の長い名詞語群まで、無数といえる程の形が考えられる。しかしながら、英語が「全く耳の言語である」という特性を考慮に入れるならば、実際に用いられる名詞語群は、特別な場合を除いて、さほど長いものではない⁵⁾。

短い名詞語群の大部分は *determinative+head noun* という構成をもち、これには、イメージの明確な具体名詞が多く用いられる。(これに抽象名

詞が用いられると、他の修飾限定辞がないために、抽象度が高くなり、明確な意味規定は難しくなる。）

He loosed *the thongs*, placed *the pistol* in *the cart*, and dressed hurriedly. Then he switched on *the torch* again and placed it in *the cart* with *the light towards him*. He took *the pistol*, released *the cartridge case*, emptied *the cartridges*, wiped each one with a *handkerchief* notched *their heads* with a *clasp knife*, returned them to *the case* and returned *the case* to *the pistol*. Then he switched off *the light*, put it in *his pocket* and jumped to *his feet*.⁶⁾

上例のように、単一名詞語群がくり返して多く用いられる文には、ある特殊な文体効果が感じられる。英語だけに限らず、一般に名詞語群は、判断の前提ともいべき表象行為を示すものであって、その意味では、カメラ・レンズに映しだされた対象ということができる。長い名詞語群には、先程のべたように、命題を内包する 경우가多いが、単一名詞語群の場合は、ある特殊な文脈において、単純判断を含む以外⁷⁾は概して、表象的機能に終止する。したがって、カメラ・レンズにとらえられる対象がただ一つしかないということを意味する単一名詞語群がくり返し多用される場合は、レンズ距離の短かさと、そのカメラ・アイのはやい動きを暗示することになる。これは当然描写の緊迫感と、テンポの速さを読むものの心によび起す。抽象プロセスを通じて、一つの意味世界を生みだす余裕のない場合、すなわち、非常に緊迫した状況における意味伝達には、殆んどエピソードが用いられることがないことからわかるように、この種の文体は結果的には、非常に緊張した context をつくりあげる。作家の感情を想起させ、それがまた、読者の感情のたかまりをひき起す点では、表現のふくらみが認められるが、反対に、また黒白映画に似て、たとえ行動性の表現に適している、表現のゆたかさに欠ける文体となっている。

長い名詞語群の場合には、次の二種が考えられる。まず一つの名詞語群

の中に、いくつかの小名詞語群が含まれているために、その構成が長くなるものと、ネクサスを変質したり、凍結するために、あるいはネクサスを従属させるために長い名詞語群となったものの二種である。前者に於いては、カメラ・レンズは、その中心にとらえる核名詞の対象の他に、いくつかの小核名詞の対象をも同時にとらえることになる。つまりそこに見られるのは、核名詞を中心にしたいくつかの対象の関係性である。これは同時にカメラと表現核の間の距離の大きさを暗示する。映画に於けるロングショットに相当するといえる。

後者の、表現核としての名詞は一つで、あとは叙述関係の修飾部を伴うために長い構成をもつ名詞語群の場合は、一つの対象に向けられるカメラ・タイムの長さに類推される。描写が詳細になる反面、描写テンポの遅さを暗示する。映画に於けるフルショットに相当しよう。

物語の導入部では、物語状況の設定のため特に関係性を叙述することが必要である。そしてまた、その関係性の叙述のかたわら、序々にカメラが対象を導入するためには、遠写すなわちロングショットから、カメラを対象にクローズアップする手法が普通用いられる。構成の長い名詞語群が、物語の導入部に於いて、概して多く用いられるのも、この辺の事情を示すものと思われる。また、物語の完結部にあっても、対象からカメラを徐々に遠ざけることによって、作品に余韻をあたえながら物語の意味世界を完結させる場合がある。このような場合にも比較的長い名詞語群が用いられるようである。ここでは一例として、先程、単一名詞語群の積み重ねの文体の例としてあげた作品の導入部と完結部をあげておく。

(導入部)

It was a frosty January night about ten o'clock. A large barge drawn by two horses was coming slowly down the canal nearing its destination at Portobello Bridge, Dublin. There was no moon, but now and again glaring

lights from the tramcars that rattled over the Bridge lit up the dark waters of the canal, the grey bulk of the barge, the taut rope, the narrow gravel path and the two lean horses walking slowly in single file with their heads drooping.⁸⁾

(完結部)

There was a deafening roar as bullet after bullet crashed through the sleeper's breast. Then in the silence that followed, the rattling of the window, the fragments of the lamp falling to the floor, sounded like the dying echo of a thunder-clap. The woman turned, dropped the smoking pistol to the floor and burst into a wild shriek of insane laughter. Then there was silence again. Little clouds of smoke roamed about the ceiling. The figure on the bed was still.⁹⁾

ついでながら以上のような長い構成を持つ名詞語群は、文体のバランスに関係するので、さきにのべた、核名詞と修飾部の分離をおこすこともしばしば見られる。

b 核名詞の抽象度

さきに名詞語群の表現核である中心名詞はカメラ・レンズに映る対象であるという類推を行ったが、その核名詞の抽象度も文体素としての可能性を含んでいる。抽象度のきわめて低い具体名詞の場合は、カメラ・レンズに映る客観的なイメージの強さをあらわしているが、その抽象度があがるにつれて、判断を伴う作家の主観が感じられるようになる。それは、作者の対象に対する判断・抽象作業が行われたことを示し、同時に積極的な作家の姿勢が暗示される。「或る言語現象の特殊の言語的表現(大抵強い感情の興奮によってひき起こされる)を与えるために、言語は文体的に見て価値ある形態、たとえば抽象実詞または実詞化された形容詞を選ぶのである(名詞構文と英語 M. Deutschbein 東田千秋訳)」ここで再びカメラ・レンズの類推を用いれば、具体名詞による名詞語群がリアリズム風の筆致に一致するのに対して、抽象度の高い名詞語群は作者の主観というレンズを

通して、作画的プロセスによって生じたイメジということができる。核名詞の抽象度が高く、更にそれを限定する修飾部が少ない場合は、更にこの傾向がよい。

*The magnitude of the cousins' dislike for the old man was as difficult to determine as the degree of the old man's insensibility to it. After all, it was based on nothing important, two or three cents' worth of hard candies a day and a few little apparently innocent exchanges of words among them, but it had been going on so long, for so many years.*¹⁰⁾

*By the time that Mr. Kruppper arrives at the box and assures the usher's neutrality with a liberal tip, the boy has plummeted like a stone to the depths of sleep, all the way down to the velvety bottom of it, without a ripple to mark where he has fallen.*¹¹⁾

したがって、この種の文体は、意味世界の緊張度をゆるめることなく、簡潔な文章構造で複雑な関係を表現出来る反面、直接感覚に訴えることが少ないため、ふくらみにかける無機的な感じをあたえる。この抽象度の高い凍結ネクサスの名詞語群の表現力について、イエスペルセンは次のようにのべている。

私の知る限りではその効果は多くのぎこちない表現をさける力をわれわれに与えてくれる点にある。なぜならもしこのような語がないと、同じ観念を表わすのに従節が必要となるであろう。…しかし一般に定動詞で表現されたものを名詞で表現すると、英語はより抽象的になるのみならず、より難解にもなるが、それはとりわけ動詞の実詞では、動詞の生命ともいふべき時制・叙法・人称などの要素のいくつかが消失するという事実によるものだ。名詞的文体は、それゆえ、哲学の目的に役立つかも知れないが、日常生活の目的にはあまり便利ではない。

(*The Philosophy of Grammar* § 10. 半田一郎訳)

核名詞の抽象度が高いという場合、それはなにも、イエスペルセンのい

うネクサスの実詞が表現核になるときだけをいうのではない。本論2の e であげたように判断作業が加味された場合、単一の具体名詞でも抽象度を高めることがある。

またログショットによって対象を徐々につき離し、物語の意味世界を余韻をもたせたまま完結する手法は先にもふれたが、同じような効果から、抽象性の高い表現が物語の完結部に用いられる場合がある。その例：

“What is *the matter with me?* I will do *something dreadful* if I am not careful,” she thought, and turning *her face to the wall*, began trying to force herself to face bravely *the fact that many people must live and die alone, even in Winesburg.*¹²⁾

All night *the two old men* planned *their settlements*, and *the two young ones* sat happily back in a corner, watching *the elaborate fence*, with the *secret knowledge that the world is always open to the young.*¹³⁾

c 形容詞節と名詞語群

一般的に antecedent+relative clause としてのべられる関係は、一つの完全なネクサス(文)が、意味量をかえることなく、その中に含まれる名詞に表現核が移行した名詞語群といいかえることができる。この場合、ネクサスの表現量には変化がなく、その質が名詞中心の表現に変っただけである。原則的にはあらゆる文は、その中の名詞を表現核にした名詞語群に変質することができる。英語の場合、この変質、核転位のプロセスがかなり容易にできるということは英語の表現力の柔軟性を示すものに他ならない。(存在を表象する単純判断の文に於いても、本論2の e で述べたような、単一の名詞語群に変質することが可能である。)英語教育や、翻訳の場合に、大きな支障となっている問題の一つは、日本語には、ネクサスから名詞語群への変質という点に於いて、英語ほどの柔軟性がないということであろう。たとえば、

文体素としての名詞語群

The honest boy reading the difficult book at the desk came up to Tokyo from a southern island last year.

という文から、その構成要素の各名詞を表現核にした名詞語群は理論的には次のようにひき出すことができる。

1. *the honest boy reading the difficult book at the desk who came up to Tokyo from a southern island last year*
2. *the difficult book that the honest boy is reading at the desk, who came up to Tokyo from a southern island last year*
3. *the desk at which the honest boy is reading the difficult book, who came up to Tokyo from a southern island last year*
4. *Tokyo to which the honest boy reading the difficult book at the desk came up from a southern island last year*
5. *a southern island from which the boy reading the difficult book at the desk came up to Tokyo last year*
6. *last year when the boy reading the difficult book at the desk came up from a southern island to Tokyo*

このように英語に於いては、原則的に、ネクサスはその表現量をかえることなしに、それが含む名詞を表現核にした名詞語群に変質することが比較的容易である。これを日本語で処理するには、3, 5 の場合、はじめにネクサスの形を借りて、さらにその中の名詞を重点的に指示しなければならないし、また 4, 6 の場合には非常にぎこちない形で処理しなければならない。これは、英語の breath-group の持つ意味世界の統辞柔軟性（主に前置詞の機能による）と relatives の持つ span 伸縮性によるものである¹⁴⁾。さらに英語の表現力に柔軟性をあたえるものとして、本論 2 の c の 2) でとりあげた、名詞以外の語の表現核への昇華がある。上例を利用すれば、

the difficulty of the book which the boy is reading at the desk, who came up to Tokyo from a southern island last year.

Relatives の中でも which, who, where などと、that では span 伸縮

性あるいは照応能力といったものが異なる。したがって *wh*-relative の多い文体と *that* の多い文体とは当然文体効果も異なるといわなければならない。*that* にくらべて *wh*-relatives の方が照応能力が大きく、それは照射距離の大きいカメラ・レンズを類推させる。*that* は即物的で平面的な直線的な描写に多く用いられるに対して、*wh*-relatives の場合は原型的な意味世界に付加ネクサスを多数投入することによって、意味世界の立体化、緻密化という効果が得られる。

Even then he had that same alertness *which* he had to wear later day and night without changing or laying aside, like the clothing *which* he had to sleep in as well as live in, and in a country and among a people *whose* very language he had to learn—that unsleeping care *which* must have known that it could permit itself but one mistake; that alertness for measuring and weighing event against eventuality, circumstance against human nature, his own fallible judgement and mortal clay against not only human but natural forces, choosing and discarding, compromising with his dream and his ambition like you must with the horse *which* you take across country, over timber, *which* you control only through your ability to keep the animal from realizing that actually you cannot, that actually it is the stronger.¹⁵⁾

その時になっても、彼は相変わらず用心深かった。その警戒心は、あとになって、変えてしまうことも、かなぐりすてることもできず、起きている時も寝ている時も着換えずに着込んでいる洋服のように、身につけざるを得なかったものであった。特にその警戒心は見知らぬ土地で、これからその言葉をおぼえていかなければならないような人々の間にあっては尚更大切なことであった。まさしく、それは、もうこれ以上のあやまりはおかすことはできないんだという不断の緊張の要る用心深さであり、彼はたえず、事件にしても、大事なものであるいは偶発的なものと油断なくはかりにかけ、人間性が環境にたえ得るものか、どうか、彼のあぶなっかしい判断力や肉体が人々の圧力や自然の力に対応できるものかどうか用心深く優劣をためしたし、自分の夢や望みについても、あれこれを取捨選択して、油断なく妥協する仕末であった。それはまるで手に負えない馬を野につれだして、乗りまわす時のような用心深さであった。そんな馬を乗りこなすには、実際にはその馬が自分の手に負えないしろものでも、それを馬に感ずかせないように用心しなければならない。

d 体言どめとしての名詞語群

さきに英語に於いては、ネクサスがその一部の名詞に表現核を転位することによって、ネクサスの変質が比較的容易であることを述べたが、これをも含めて文の構成要素に過ぎない名詞語群が、それだけで独立して文代用に用いられることがある。これは普通体言どめの文章として知られている。体言どめは、単純なもので一見ネクサスを内包しないように見えるものもあるが、少なくともそれは単純判断を含むという意味で¹⁶⁾、全くネクサスの変質したものということができる。

この体言どめについては a) 変質はしているが一応ネクサスを内包することによって、完全な意味世界を有し、しかも中心名詞に表現核が転位し、強調されているということ。 b) 核名詞の格の抽象化によって生じる表現の中絶。 c) 表現の中絶から来るカメラ・アイの一時固定乃至は長いカメラ・タイムの暗示から生じる詠嘆性、の三つからもたらされる効果が考えられる。意味論的には、変質していてもネクサスを有しているので問題はないが、それに関する作者の判断や発言が意識的には差控えられるために、逆にそれは読むものの心の中にそのネクサスのもつ意味世界の方向づけを要求し、意味世界完結への積極的参加をうながすことになる。ここから体言どめの余韻の効果が生まれるのである。これはまたネクサス関係全体にカメラ・レンズをあてる場合よりも、ネクサスを内包しながら、しかも瞬間的にカメラ焦点を核名詞(対象)にあわせたり、対象の行為状態に(核名詞化された対象の predicative) 直接あわせることによって効果的な表現が得られる。F. S. Fitzgerald より二つばかり例をあげてみる。

“And George Hardt?” Charlie inquired.

“Back in America, gone to work.”

“And where is the Snow Bird?”

“He was in here last week. Anyway, his friend, Mr. Schaeffer, is in Paris.”

*Two familiar names, from the long list of a year and a half ago. Charlie scribbled an address in his note book and tore out the page.*¹⁷⁾

Again the memory of those days swept over him like a nightmare—the people they had met travelling; then people who couldn't add a row of figures or speak a coherent sentence. The little man Helen had consented to dance with at the ship's party, who had insulted her ten feet from the table; the women and girls carried screaming with drink or drugs out of public places—.¹⁸⁾

体言どめは日本語に於いては、変質ネクサスのあと、すなわち語群の最後に核名詞がくるため、焦点を核名詞に徐々に合わせていくカメラが、その核名詞をとらえた瞬間、停止するという、中絶としての表現効果はかなり大きい。しかし英語の場合、表現核となる名詞は概して語群の前位をとるため、名詞への表現核の転位・強調よりもむしろネクサスの変質に強調がおかれる。したがって、英語でも実質的な表現核が語群の最後におかれた体言どめの方が割合効果的である。

Not a sound in the dark street but *the squelching* of the displaced mud.¹⁹⁾
So much for the effort and ingenuity of *Montmartre*.²⁰⁾
Somehow an unwelcome *encounter*.

体言どめの名詞語群と同様なものに、同格としての名詞語群がある。この場合は同一対象を指す名詞が二度くり返されるため、加速度的に意味世界が緊張化したり、又は同一対象に対して、異なる名詞によって、その意味を両方から圧縮して行く効果がみとめられる。

Sounds of drunken revelry came through the door, *sounds* packed close together as of a pot boiling furiously.²¹⁾

次の例は、体言どめと同格の名詞語群が同時に用いられている場合である。

Then the aftermath, *her escaping pneumonia by a miracle and all the attendant horror.*²²⁾

e 名詞語群とネクサスの中間体

With-Construction

英語の with は付帯状況を示すものと

して、ネクサスを形成する object と objective complement を導く場合がある。この形は and などの connective に導かれた節と同じような内容を簡潔に表現し得る。しかしこれはあくまでも名詞中心の表現であって、名詞語群の一つにかぞえることができよう。同じ付帯状況を示しながら、with 後位の核名詞をとる名詞語群を従える固定的な表現があることがそれを示している²³⁾。

Pilon looked at his friends *with drooped eyes*, and they looked back at him.²⁴⁾

She was the gentlest being imaginable, *with a gentle voice and a heart overflowing with kindness to every body except soldiers and policemen.*²⁵⁾

この種の表現では、connective を用いず、無色な preposition “with” によって主節と接続し、主節との関係を明示することなく、付帯ネクサスを導き、しかも表現中心を名詞にあわせることができる。この形式的な表現力については、すでに「構造的に見た名詞語群」の項でふれたように、核名詞の位置に左右されることが多い。

Absolute Participial Construction

with-construction に

於いて核名詞が前位をとり、その修飾部として分詞がくる場合には、with があらわれない時もある。absolute participial construction といわれるものである。この場合は with-construction の場合よりも一層名詞語群として力が強く、付加的な体言どめとして、名詞に焦点をあわせて停止するカメラ・アイの効果が期待される。次例は、absolute participial construc-

tion が先行する名詞の同格として用いられることによって、その名詞語群としての性格を強く押し出しているものである。

It had been given, even the most wildly squandered sum, as an offering to destiny that he might not remember the things most worth remembering, the things that now he would always remember—*his child taken from his control, his wife escaped to a grave in Vermont.*²⁶⁾

Gerundive construction 更にネクサスと名詞語群の中間体として、gerundive construction があげられる。ネクサスが完全に凍結されればネクサス実詞に昇華するわけであるが、動名詞の場合は、時制・態などの動詞性がかかり残っており、そのために名詞語群としての力は弱くなっている。核名詞のもたらす impact が弱いからである。d の最後の例は文 gerundive construction が同格の名詞語群に用いられている例である。

以上、名詞語群をとりあげて、その形式的な表現力を考えてみたのであるが、それらはいくまでも文体素としての可能性にすぎず、それらが文体素として存在し得るようになるには、作家の創作態度と作品のテーマという土壌がなくてはならない。

NOTES

- 1) 毛利可信, 英語意味論研究: 研究社。
- 2) 志賀 謙, 文体素としての分離前置詞: 立正女子短期大学紀要第8集。
- 3) P. Roberts, *Patterns of English*
- 4) 英語意味論研究では主辞吸収, 賓辞吸収としてとりあげられている。
- 5) C. A. Smith (高谷信一訳), *The Short Circuit in English Syntax*: 研究社
なお、試みにしらべて見たところ、名詞語群の平均語数は 4-6 のようであるが、名詞語群の場合、平均語数を求めるような統計的な追求は無意味であるように思われる。コンテキストによって異常に短いものや、長いものが突然現われる場合が多く、あくまでもコンテキストの関連に於いてとらえるべきものであろう。

文体素としての名詞語群

- 6) L. O'Flaherty, "Wolf Lanigan's Death"
- 7) 単純命題を含む名詞語群 / 本論 2 の e。
- 8) L. O'Flaherty, "Wolf Lanigan's Death"
- 9) *Ibid.*
- 10) T. Williams, "Hard Candy"
- 11) *Ibid.*
- 12) S. Anderson, "Adventure"
- 13) G. Green, "When Greek Meets Greek"
- 14) C. A. Smith (高谷信一訳), *The Short Circuit in English Syntax*; 研究社
- 15) W. Faulkner, *Absalom, Absalom!*
- 16) 毛利可信, 英語意味論研究; 研究社
- 17) F. S. Fitzgerald, "Babylon Revisited"
- 18) *Ibid.*
- 19) L. O'Flaherty, "Wolf Lanigan's Death"
- 20) F. S. Fitzgerald, "Babylon Revisited"
- 21) L. O'Flaherty, "Wolf Lanigan's Death"
- 22) F. S. Fitzgerald, "Babylon Revisited"
- 23) 山川喜久男, 付帯状況を示す *with*-phrase; 英語青年 Vol. CII.-No. 9
- 24) J. Steinbeck. "Tortilla Flat"
- 25) R. Lynd, "Woman"
- 26) F. S. Fitzgerald, "Babylon Revisited"